

## ヤマジノギク ‘TOYOロマン’, ‘TOYOスマイル’ の育成について

松成 茂・\*村山亢治・\*\*吉田俊一

(大分県温泉熱利用花き園芸試験場・\*大分県竹田農業改良普及所・\*\*大分県白杵農業改良普及所)

Sigeru MATSUNARI, Kouji MURAYAMA and Syun-ichi YOSHIDA : Breeding of  
*Heteropappus hispidus* Lees. Cultivars ‘TOYO Roman’, ‘TOYO Smile’

キク科の1~2年生草本のヤマジノギク (*Heteropappus hispidus* Lees. = *Aster hispidus* Thunb.) の野生種より紫色でスプレー咲きの園芸品種を育成したので、その育成経過と特性の概要について報告する。

## 1. 育成経過

1956年宮崎県南部に自生する野生種を採種し、特に原種には少ない濃紫色系統を中心に毎年実生選抜を繰り返した。1986年までは、種子のみで優良系統の維持をした。しかし、1987年より栄養繁殖(挿し芽)による増殖が可能となったので、同年以降は実生選抜とともに優良系統の維持増殖は栄養繁殖で行った。1987年には13系統、さらに'88年には7系統を選抜し、その中の1系統を‘TOYOロマン’と命名した。また、‘TOYOスマイル’は1987年実生中より選抜した。なお、両品種とも1989年から2年間試作した結果、有望と思われたので'91年3月品種登録申請を行った。

## 2. 特性の概要

‘TOYOロマン’：花色は青味紫 (JHSカラーチャートNo.8310)、一重咲きで花径は4.2cm、花弁数は25~30枚である。葉の表面の色は暗黄緑 (JHSカラーチャートNo.3313) であり、わずかに毛が認められ、葉縁には鋸歯がある。草姿は立性で、7月上旬定植の露地栽培では草丈が1m前後と高い。1株から3~4本の主茎が立ち、各茎の先端部より3~5本の2次分枝が出て、その先端に5~15花が着生する。1花茎当たり40~60花着生する。

自然開花期は11月上旬であるが、電照栽培により開花幅を広げることができる。

‘TOYOスマイル’：花色は明青味紫 (JHSカラーチャートNo.8305)、一重咲きで花径は3.6cm前後とやや小さく、花弁数は30枚程度とやや多い。葉の表面の色は暗黄緑 (JHSカラーチャートNo.3508) であり、わずかに毛が認められ、葉縁の鋸歯は‘TOYOロマン’よりやや深い。草姿は立性で、7月上旬定植の露地栽培では、草丈が70~80cmとやや低い。1株から3~4本の主茎が立ち、各茎の先端部に10cm前後の2次分枝が9本程度着き、その2次分枝の先端に3~4花が着生する。1花茎当たり30花程度着生する。特に、本種は花が主茎上部に揃って咲き、コンパクトな草姿をしている。自然開花期は11月中旬であるが、‘TOYOロマン’同様電照栽培により開花幅を広げることができる。

## 3. 栽培上の注意

浅根性で過湿になると根腐れを起こすので、排水の良い畑地が適する。植付本数は10a当たり1.5~2万本である。施肥量は窒素成分で10a当たり10~20kg必要である。露地栽培(季咲き栽培)では6月下旬に挿し芽、7月上旬に定植を行う。電照栽培では7月中旬から順次定植するが、収穫期が11月下旬以降になる場合は施設内で栽培する。両品種とも消灯後50~60日程度で開花するが、消灯時期が遅くなると到花日数が長くなる。

第1表 露地栽培における開花特性

品 種	1) 開花日 月. 日	切花長 cm	切花重 g	花径 cm	花弁数 枚	舌状花の長さ cm	舌状花の幅 mm
TOYOロマン	11.3	100.6	70.6	4.2	27.4	2.0	6.3
TOYOスマイル	11.8	73.4	53.7	3.6	29.5	1.8	5.3

注) 1) 開花日は開花開始日, 2) 定植 '90.7.10 摘心7.20 3本仕立て

第2表 12月上旬出し作型での開花特性

品 種	開花日 月. 日	到花日数 日	切花長 cm	切花重 g
TOYOロマン	11.30	50	112.5	78.3
TOYOスマイル	12.1	51	93.5	76.0

注) 定植 '90.8.9 摘心8.20 3本仕立て  
電照期間8.15~10.10

第3表 12月下旬出し作型での開花特性

品 種	開花日 月. 日	到花日数 日	切花長 cm	切花重 g
TOYOロマン	12.26	56	117.5	83.7
TOYOスマイル	1.2	63	107.3	92.2

注) 定植 '90.8.24 摘心9.6 3本仕立て  
電照期間8.24~10.30